

島根半島沿岸におけるナルトビエイ *Aetobatus narutobiei* の記録

鈴木 渚 斗

島根大学大学院自然科学研究科, 〒690-8504 島根県松江市西川津町 1060

Record of Naru Eagle Ray, *Aetobatus narutobiei* from Coastal Area of Shimane Peninsula

Kaito SUZUKI

Graduate school of Natural Science and Technology, Shimane University,
1060 Nishikawatsu-cho, Matsue, Shimane Pref., 690-8504 Japan
Email: kaito3523@gmail.com

Abstract The Naru eagle ray, *Aetobatus narutobiei* White, Furumitsu and Yamaguchi, 2013 was collected from coastal area of Shimane Peninsula, Sea of Japan. This is the first record from Shimane Prefecture of this species.

Key words : *Aetobatus narutobiei*, Shimane Peninsula, Sea of Japan

キーワード : ナルトビエイ, 島根半島, 日本海

はじめに

板鰐類(サメ・エイ類)は, 世界に1000種以上, 日本周辺からは200種以上が知られている(木村ほか, 2018). しかし, 板鰐類は体サイズが大きいことや, 一度に漁獲される量が少ないことから調査・研究が少ない分類群でもある. 実際に, 環境省が公表している海洋生物レッドリストでは, 魚類の情報不足112種のうち約半数にあたる52種が板鰐類となっている(環境省, 2017). また, 板鰐類は出産までに長い年月を要するが, 一度に出産する卵や胎仔が少なく(木村ほか, 2018), 絶滅の危惧に瀕している種も多い. なお, 海洋生物レッドリストに掲載されている板鰐類は, 情報不足を除けば, 絶滅危惧が1種, 準絶滅危惧が16種となっている(環境省, 2017).

一方, 板鰐類の中には, ナルトビエイ *Aetobatus narutobiei* のように個体数が増加したことで漁業被害をもたらす種も存在する(山口ほか, 2018; 伊藤・平川, 2009). ナルトビエイはトビ

エイ目に属するエイ類で, 有明海や瀬戸内海において1990年代から個体数が増加したことが知られている(山口ほか, 2018). 本種は群れで来遊し, アサリ *Ruditapes philippinarum* やタイラギ *Atrina pectinata*, サルボウガイ *Anadara kagoshimensis* といった水産有用二枚貝を専食することから(川原ほか, 2004), 二枚貝の食害生物として注視されており, 駆除を実施している地域もある(山口ほか, 2018). しかし, 駆除の効果もあり, 近年ナルトビエイの個体数は減少傾向にあることから, 海洋生物レッドリストにおいて, ナルトビエイは準絶滅危惧として扱われている(環境省, 2017). したがって, ナルトビエイは水産有用二枚貝の食害生物として注視する必要があるながら, 準絶滅危惧として保護・保全が求められる種であるため, 本種の情報が少ない地域では, 漁獲記録などを積み重ねておくことが, 今後の対策(食害防除や保護・保全)を考える上で重要となる.

今回、著者は日本海に面する島根県北東部の島根半島沿岸に設置された定置網によって得られた漁獲物の中に、島根県では初報告となるナルトビエイを確認したため報告する。

材料と方法

ナルトビエイ標本は2019年11月13日に、株式会社七類定置網漁業が島根半島（島根県松江市七類地先：35° 35' 08" N, 133° 14' 36" E）に設置している定置網（水深約55m）で漁獲された。

標本は、研究室へ持ち帰り、生鮮状態で写真撮影を行った後、全長、体盤長、体盤幅、重量の測定を行った。なお、標本の同定は、山口（2018）に従って行った。

結 果

図1に標本の写真を示した。標本は、体盤背面は黒褐色であること（図1-A）、背鰭後方に尾棘があること、歯は融合して1列のみのプレート状になっていること（図1-B）などからナルトビエイと同定された。標本個体は全長1262mm、体盤長392mm、体盤幅621mm、重量4.295kgのメスであった。なお、体サイズの測定後、胃と腸を摘出し消化管内容物の確認を行ったが、消化管内容物は存在しない空胃個体であった。

考 察

日本海側におけるナルトビエイの記録は、山口県、兵庫県、京都府、福井県、新潟県、秋田県か

らある（河野ほか，2014；山口，2018）。また漁業者によると、島根半島周辺の定置網には、数年前から本種が年に数個体～数十個体漁獲されるという（漁業者，私信）。したがって、本種は島根半島周辺では普通にみられる種でありながら、これまで記録がなかったと考えられた。また、本種が漁獲された島根半島は、鳥取県との県境でもあり、鳥取県においても本種が分布している可能性が高いと考えられた。有明海における本種の分布は、水温に応じて変化し、水温が16～20℃となる5月頃から浅場に来遊し、水温が20℃を下回る10月頃から有明海の外へ移動することが知られている（横山，2014）。さらに、周防灘で行われたバイオロギング技術を用いた最新の研究結果も、本種の分布が水温に応じて変化することを支持している（野副ほか，2020）。今回、本種が漁獲された日本海中部～南西部では、近年平均海面水温が上昇していることから（気象庁，2021）、今後、島根県沿岸においても、海水温の上昇に伴って本種の来遊数が増加することも推察される。また、本種は主に沿岸域や汽水域に分布することから（山口，2018）、島根県東部に位置し、日本有数の規模を誇る汽水域である中海・宍道湖に本種が来遊する可能性もある。岡山県で行われた本種の食性調査では、消化管からヤマトシジミ *Corbicula japonica* が検出されていることから（亀井ほか，2009）、本種が中海・宍道湖に来遊するようになれば、宍道湖のヤマトシジミをはじめ、二枚貝を対象とした漁業に被害をもたらすことが

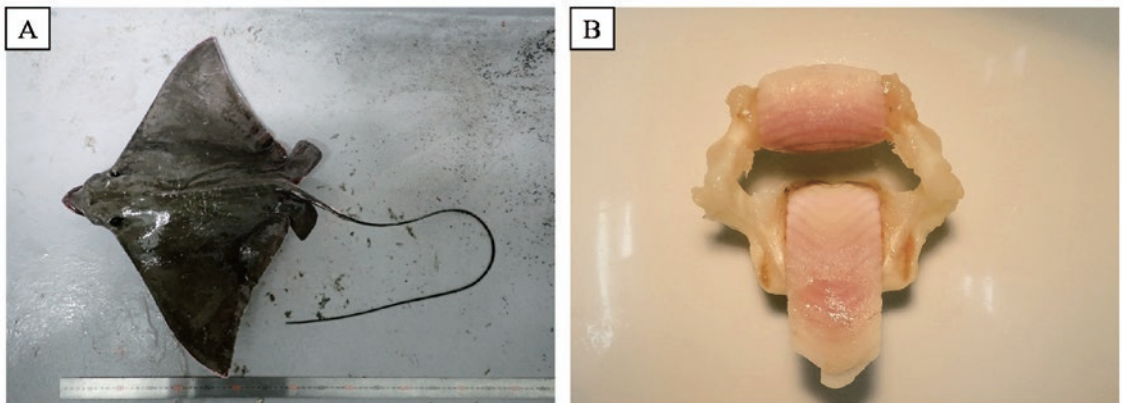


図1 漁獲されたナルトビエイ標本（A：背面側，B：顎とプレート状の歯）

懸念される。

一方、ナルトビエイは、汽水域や河口部の近くで交尾・出産を行うことから（横山ほか，2014），中海・宍道湖は本種の交尾・出産の場や，幼魚の育成場として機能することも考えられ，これらの汽水域が近傍にある島根半島沿岸は本種の保全を考える上で，重要な海域となる可能性もある。

以上より，本種による二枚貝の食害を防除することや，本種の保護・保全を考える上では，本種の漁獲情報や，二枚貝漁場における確認情報（食害痕の有無）など，さまざまなデータを蓄積しておくことが重要であり，特に調査・研究が少ない日本海側においては，本種の今後の動向に注意を払っておく必要があると考えられた。

謝 辞

株式会社七類定置網漁業の宮本輝雄氏には，標本採集および情報提供をしていただいた。

文 献

- 伊藤龍星・平川千修（2009）胃と腸の内容物からみた周防灘南部沿岸におけるナルトビエイの食性。水産技術，**1**: 39-44。
- 亀井良則・浜口昌巳・萱野泰久（2009）岡山県沿岸域で採捕されたナルトビエイの消化管内容物。岡山県農林水産総合センター水産研究所研究報告，**24**: 32-34。
- 環境省（2017）別紙①：【魚類】海洋生物レッドリスト。（2017）<https://www.env.go.jp/press/files/jp/106403.pdf>。（2021年5月5日アクセス）。
- 川原逸郎・伊藤史郎・山口敦子（2004）有明海のタイラギ資源に及ぼすナルトビエイの影響。佐賀県有明水産振興センター研究報告，**22**:

29-33。

- 河野光久・三宅博哉・星野 昇・伊藤欣吾・山中智之・甲本亮太・忠鉢孝明・安澤 弥・池田 怜・大慶則之・木下仁徳・児玉晃治・手賀太郎・山崎 淳・森 俊郎・長浜達章・大谷徹也・山田英明・村山達朗・安藤朗彦・甲斐修也・土井啓行・杉山秀樹・飯田新二・船木信一（2014）日本海産魚類目録。山口県水産研究センター研究報告，**11**: 1-30。
- 木村清志・瀬能 宏・山口敦子・鈴木寿之・重田利拓（2018）海産魚類レッドリストとその課題。魚類学雑誌，**65**(1): 97-116。
- 気象庁（2021）海域別の海面水温の上昇率の特徴。https://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/data/shshind/a_1/japan_warm/japan_warm_larea.html?larea=2。（2021年5月5日アクセス）
- 野副 滉・大形拓路・伊藤輝昭（2020）標識放流から推定した周防灘におけるナルトビエイの移動生態。福岡県水産海洋技術センター研究報告，**30**: 13-20。
- 山口敦子（2018）アカエイ科。中坊徹次（編）「小学館の図鑑Z，日本魚類館」: 53-55。小学館，東京。
- 山口敦子・橘 紗希・横山佳子・古満啓介（2018）ナルトビエイの有効活用と普及促進プロジェクトの立ち上げ。エイの漁獲・処理からレシピ開発，普及啓蒙まで。板鰓類研究会報，**54**: 27-39。
- 横山佳裕・森川太郎・藤井暁彦・内田唯史・中西弘（2014）二枚貝類の保全に向けたナルトビエイ (*Aetobatus flagellum*) 個体群モデルの開発と効果的な駆除方法の検討。水環境学会誌，**37**(3): 111-117。